

「多媒体利用における本学の教材の研究と開発」 - ブ レ ッ ソ ン の 芸 術 -

研究年度・期間：平成6年度～平成7年度

平成6年度

研究代表者：長野 克亮

(放送学科 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄

(教養課程 教授)

共同研究者：坂本登志子 高田 誠三
(放送学科 教授) (写真学科 教授)
藪 亨 豊原 正智
(教養課程 教授) (芸術計画学科 助教授)
大橋 勝 木原 俊哉
(芸術計画学科 講師)(音楽教育学科 講師)
松井 純子
(教養課程 助手)

研究助言者：田中 仁

(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：角谷 信

(教養課程 副手)

平成7年度

研究代表者：長野 克亮

(放送学科 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄

(教養課程 教授)

共同研究者：坂本登志子 高田 誠三
(放送学科 教授) (写真学科 教授)
藪 亨 豊原 正智
(教養課程 教授) (芸術計画学科 助教授)
大橋 勝 木原 俊哉
(芸術計画学科 講師)(音楽教育学科 講師)
松井 純子
(教養課程 助手)

研究助言者：田中 仁

(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：角谷 信

(教養課程 副手)

研究経過の概要

本学所蔵のカルティエ＝ブレッソンの写真のコレクションを材料として、視聴覚教材の制作法とその教育効果を、制作を通じて検証することを目的に本研究を行った。その作業を行うにあたり、写真・映像・美学・放送・音楽の研究者、事務担当者、研究補助者でプロジェクトチームを編成した。まず学内で許可を得、次に庶務課を通じて、著作権をもつPPS通信にブレッソンの写真をビデオ化することの許可を求めたところ、脚本を見て検討することとなった。プロジェクトチームのメンバーで会議を重ね、ブレッソンの経歴と芸術について討論して、ビデオ化の概要を決める。小人数のチームで概要に沿った細部の脚本製作にあたり、さらにブレッソンに関する論文・写真集・展覧会等を調査研究して脚本づくりに着手する。教育目的を想定していることと、本学コレクションという限られた材料を用いるという条件から、過度に演出的な表現は避け、ブレッソンの芸術の視点と経歴とを分かり易く紹介する構成に仕上げることで合意を得、これに沿って脚本を製作する(脚本添付)。脚本を庶務課を通してPPS通信社に提出して許可を求めたところ、今年2月に製作許可が下りる。早速ビデオ化するにあたり、作業日程の打合せの会議を開き、スケジュールを決定する。ビデオ撮影のため情報センター地下の収蔵庫より作品を搬出し、9号館スタジオに移動させ、脚本に沿って種々のアングルで収

録した。この映像をある程度編集した時点で、ナレーションを録音する作業に平行して入る。音声の収録は、放送学科のスタジオを使用して行った。次に、ナレーション入りのビデオを視聴しながら適切な曲選びを行い、一旦ナレーションとBGMの入ったビデオを作った。さらに、このビデオに編集の手直しを加え、最終的な完成品を作り上げた。

ナレーションより

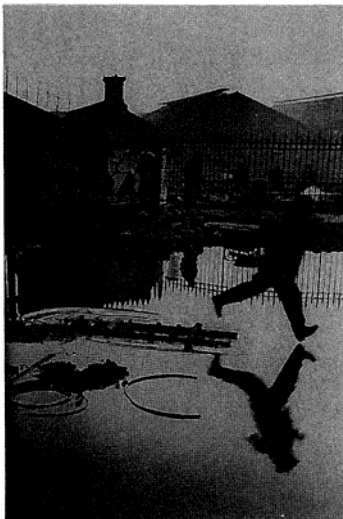
大阪芸術大学にはアンリ・カルティエ・ブレッソンの写真作品コレクションが所蔵されている。大阪芸術大学の他には、ヒューストン（米国）、ビクトリア・アンド・アルバート（英国）、ビブリオテーク・ナショナル（パリ国立図書館）に収容されている世界に四セットしかない貴重なコレクションである。

写真家H・C・ブレッソン。彼の写真の特徴を表わすものとして「決定的瞬間」という言葉が用いられる。ここで言う「決定的瞬間」とは重大な出来事や事件の瞬間を指すのではない。ブレッソンの感情によって決定され、現実の一部が切り取られた瞬間のことである。写真は、言うまでもなく瞬間的なものであるが、彼はそこに写真の独自性と価値を見出しているようだ。ブレッソンの写真には一切の演出も引き伸ばしの時のトリミングもない。シャッターを切る瞬間に全てが決定されているのである。

彼はこう語っている。

「わたしにとってカメラはスケッチブックであり、直観と内発的な心の動きにしたがう道具、すなわち視覚的な言語による問いかけと決定とを同時におこなう、瞬間の支配者なのだ。世界に『意味を与える』ためには、われわれはファインダーによって切り取るものと一体にならなくてはならない。そのためには、集中力、精神の規律、感受性、造形感覚が要求される。簡素な表現に到達するためには、手段を思い切って簡素にしなければならない。

写真をとることは、一瞬のうちに消えて行く現実の表面にありとあらゆる可能性が凝集した



1 Brtssels, Belgium 1932

8 Gare St-Lazare, Paris 1932

瞬間に息をとめるということである。イメージの征服が肉体的かつ知的歓喜へと転化するのはその瞬間である」と。

ブレッソンは32年頃に35mmライカカメラと出会い、それ以来ずっとライカを使っている。彼はほとんど50ミリのレンズを使うが、50ミリのレンズは人間の視界とほぼ一致している。ブレッソンの肉眼がとらえた視野が写真の構図になるのである。

1眼レフのカメラはシャッターを切るとファインダーが遮光されるが、ライカはシャッターを切るその瞬間もファインダーで事の成り行きを確認することが出来る。

この自分の眼とカメラの眼の完全な一致が、ブレッソンの写真の特徴である。彼は、写真は撮影の際すでに全体性・完全さがなければならぬと考えている。

「撮影とは認識である。事実自体と、その事実の意味をあたえる、視覚的にとらえた形態の厳密な構造とを、同時に一瞬のうちに認識することにほかならない。それは自己の知性と目と心情とを同一軸に置くことである」と、ブレッソンは語っている。

ブレッソンの写真の特徴として挙げられるものに、「二つの主題」あるいは「主題とそれをひきたてる他の要素」がある。

又、ブレッソンは写真家は受動的な傍観者ではなく、出来事に積極的に取り組まなければ、全体性・完全さをとらえることが出来ないと言っている。しかし、写真家はあくまで第三者であって、出来事の当事者では決してないことも強調している。彼の写真にはフラッシュや意図的な照明は用いられない。たとえ弱い光であっても自然光かその場の明かりを尊重しているのである。

カメラを持った人間は、へたをすると暴君としてその場に影響を与えてしまうが、ブレッソンは空気のように希薄で、それでいてものごとを隅々まで見通すことを、態度として目指しているのである。



17 Paris 1968

「中略」

ブレッソンの写真は刻々と変化する現実の一瞬をとらえ、そこに意味をあたえている。それは事実の持つ意味であると同時にブレッソンの眼が読み取り、創り出した意味でもある。

対象に依存するのでも、利己的な創造でもない微妙なバランスの中でブレッソンは写真を撮っている。

彼は世界中の国をまわり、様々な土地の人々や生活を撮っているが、その写真は決してエキ



332 Calle Cuauhtemoczin, Mexico City 1934

169 Coronation of King George VI 1937

ゾチシズムに墮することはない。異なる風土・習慣のむこうにある人間の普遍的な姿をとらえているのである。

そこには、ブレッソンの物事の本質にせまる厳しい態度と同時に、人間に対する限りない心優しさが現れている。

研究成果について

アンリ・カルティエ＝ブレッソンは1908年にフランスで生まれ、若い頃は絵画に関心を持ち、1927～28年にかけてアンドレ・ロートに学び、シュールレアリスムの影響を受けた作品を描いていた。彼が本格的に写真の世界に入ったのは1931年頃であった。1933年にはニューヨークで初めて個展を開いた。あまり高い評価は得られなかったが、生活する人間の姿を生き生きと写したことで、識者や若い人に影響を与える。1935～39年にかけてはジャン・ルノアールのもとで映画制作にも関わっている。1936年にロバート・キャパやデーヴィッド・シーモアと知り合い、自由な写真を撮りたいという意図で意気投合する。1937年のジョージ 世の戴冠式では式そのものよりも見物に来た人々に興味をもち、レンズを見物人に集中させて、様々なアングルで撮影している。そこには、ブレッソンの芸術の視点が窺える。写真家として活躍していたが、第二次世界大戦の渦中に、ドイツ軍の捕虜となり、脱走後、対独地下組織で活躍し、フランスの解放に努める。社会・政治に関心が向き、彼の写真にも大きな影響を与える。解放後のパリで、キャパやシーモアと再会し、ニューヨークに渡り、1947年に「マグナム」という写真通信社を設立する。その後、インド・ビルマ・パキスタン・中国・インドネシア・日本等各地を訪ね、各国の人々の生活を撮っているが、その写真は決してエキゾチシズムのみにおちいることなく、人間の普遍性を捉えている。

ブレッソンは撮影にはライカを用い、彼自身の感情によって決定された“決定的瞬間”をそ

の写真の特徴とした。又、構図的には“二つの視点”という対象性を画面の中に取り入れた。以上の事柄を念頭において、脚本を作成し、ビデオ化し、作品の完成をみた。この研究の成果は、ブレッソンの芸術性の理解と、視聴覚教材のビデオ作品である。